

Tatsuya Tanaka



巻頭インタビュー2

ユーモアあふれる “見立て”の世界

ミニチュア写真家 田中達也

次にご紹介するのは、新しい『MOUSA1』の表紙にご協力いただいた田中達也さんです。ミニチュア写真家として、見る人があっと驚くような作品を毎日発表され、SNSでも話題を呼んでいます。『MOUSA1』の表紙では、楽器を主役にした“見立て”の作品を制作してくださいました。田中さんの立体へのこだわり、そして独特のフレーム感——魅力たっぷりの“見立て”の世界をご紹介します。

聞き手 ヴァン編集部

幼い頃に育まれた“見立て”の感覚

Vent(以下、V): 田中さんは子どもの頃から絵や工作が得意だったのですか？

田中: 学校では図画工作がいちばん好きな科目でした。家でもよく漫画を描いたり、身近な材料でいろいろな作品をつくったりしていたことを覚えています。小さい頃からずっとプラモデルが趣味で、それが今につながっています。

V: 模型屋さんにはわくわくする場所ですよね、子どもならなおさら。

田中: そうですね。プラモデル屋は大好きでよく通っていまし

た。デパートに行ったときなんかは、鉄道模型などのジオラマを見て欲しくてたまらないのですが、高価なので簡単には買ってもらえない。そこで、そのジオラマをまねて、本を重ねてビルにしたりティッシュ箱などの日用品で街をつくったりしました。自分なりの“見立て”でつくった街にミニカーを置いて遊んでいたことを思い出します。

V: 田中さんの「物を見る力」というのは、そうした遊びからも培われてきたのですね。

田中: プラモデルには“見立て”の要素がたくさんあります。例えば、配管をつくりたいと思ったら、ストローを切ってシルバーに塗りダクトにしたりだとか、さまざまな日用品を使って

パーツにしていました。それが“見立て”の特訓になったのでしょうね。“見立て”というのは、身近にあるもので置き換えて、ないものを補うことに通じるのだと思います。

V:中学生や高校生という多感な時期にも、ずっと好きなことを続けていましたか？

田中:その頃は、プラモデルや絵を描くといった趣味を周りの人と共有する機会は少なかったです。ほんとうに仲のよい友達にだけ見せるぐらい。その年頃で人気なのはスポーツや音楽じゃないですか。だから僕も運動部に入っていました。高校生のときは山岳部に入り、けっこうのめり込みました。でも山を登っているときにも必ずスケッチをしたりと、常に絵を描くことが自分のベースにありましたね。大学を決めるときになって、やっぱり絵を学ぼうと真剣に考え始めました。

V:「表現者でありたい」といったアーティストの芽生えは大学時代に出てきたのでしょうか？

田中:大学生の頃はずっと緻密なイラストを描いていました。それを仕上げる根気とこだわりは現在の仕事と近いものがあります。卒業制作で描いたイラストは、機械を組み合わせて動物を形づくるというものでした。卒業後は広告デザイナーとして働きましたが、広告のキャッチコピーにダジャレの要素を入れたり、イラストには“見立て”を取り入れたりしていました。今に至るまで、子どもの頃の感覚が残っていたのかもしれない。

SNSの発信力

V:InstagramやTwitterなどのSNSで毎日作品を発信されています。

田中:広告デザイナーをしていた頃、カメラマンに「こういう写真を撮ってきてほしい」と指示しているうちに、自分自身も写真への興味が出てきたんです。思い描いた絵にするための構図を考えながら、自分でも試しに写真を撮ってみたりして。その影響でInstagramを始めました。デザインの方法にもいろ



制作風景2。緻密で繊細な作業が続く



制作風景1。ミニチュアは指先ほどの大きさ

いろあるわけで、自分の表現したいアイデアを最速で形にできるのが写真だと気付いたんです。

V:フォロワー数の多さにも驚きました。反響が大きい中、日々どんな気持ちで発信されているのか聞かせてください。

田中:リアクションがあるから続けられるんですよ。毎日一作品ずつアップするのは大変ですが、楽しみにしてくれている人がいるのでサボれません。見てくれた人からダイレクトにメッセージも届きますから、よい作品をたくさんつくりたいという励みにもなります。これはほんとうにSNSありきかなと思います。僕の“見立て”という作風も、どうやったら「いいね！」が増えるのかを分析していくうちに出来上がったんです。皆の意見が上がり上げたという感覚ですね。

V:毎日続けられることがすごいと思います。創作への意欲とアイデアを常にストックされているとお聞きしたのですが、日常のどういう場面で感度を高くしたり、インプットをしているのですか？

田中:アイデアを考えるときは買い物に行くことが多いです。お店に行くときたくさんの物が陳列されていますよね。よい案が思い浮かぶときというのは、そのアイデアに関係する何かが間接的にでも引っ掛かってくるタイミングなんです。アイデアが降りてくるためのスイッチが必要なので、いろいろな物を見て回るようにしています。

V:見るときには何か意識していますか？

田中:無意識でもいいので、とにかく目に入れるということがアイデアのヒントになります。お店に物がずらっと並んでいるように、僕のアトリエもなるべく物がたくさん見えるようにしています。壁一面に並べることで、それらを眺めながら「またこういう作品をつくれそうだな」というふうにアイデアが湧いてくるんです。よく子どもが漢字や九九を覚えるためにトイレなどに表を貼ったりするじゃないですか。何となく見ている、毎日目にするうちに頭に入っている。自分がインプットしたいものを日常的に見ることが大事だと思います。

(P.12へ続く)



《ショパンと食パン》



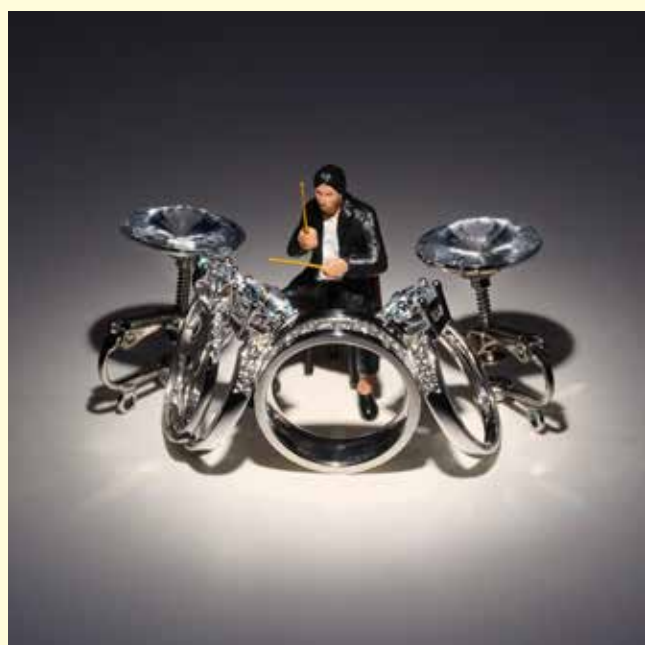
《“とって”も上手な演奏》



《演奏にはコードが大切》



《美しい音色》



《音の宝石箱や〜》

QRコードを読み取ると
制作の様子を動画でご覧いただけます。



《ハイスコア》



表紙を見てくれる生徒たちにも、
楽器の形に対する興味や愛着を
もってもらえたらいいなと
思っています。

○ 田中達也(たなか・たつや)

ミニチュア写真家・見立て作家。1981年熊本生まれ。2011年、ミニチュアの視点で日常にある物を別の物に見立てたアート「MINIATURE CALENDAR」を開始。以後毎日作品をインターネット上で発表し続けている。国内外で開催中の展覧会、「MINIATURE LIFE展 田中達也 見立ての世界」の来場者数が累計130万人を突破。主な仕事に、2017年NHKの連続テレビ小説「ひよっこ」のタイトルバック、日本橋高島屋SCオープニングムービーなど。Instagramのフォロワーは270万人を超える(2021年1月現在)。著書に「MINIATURE LIFE」、「MINIATURE LIFE2」、「Small Wonders」、「MINIATURE TRIP IN JAPAN」など。



表紙に込められた思い

V: 今回の教科書の表紙について、生徒たちに「こんなところを見てほしい」「こんなふう感じてほしい」といった願いはありますか？

田中: 僕自身、クラリネットやリコーダーを組み立てて作品の中に置きながら、あらためて「こういう形なんだなあ」と意識することができました。表紙を見てくれる生徒たちにも、楽器の形に対する興味や愛着をもってもらえたらいいなと思っています。クラリネットとリコーダーを列車に見立て、作品には《音楽に乗り乗り》というタイトルを付けました。ダジャレと言えばダジャレなんですけれど、「言葉の見立て」になっていることを意識して作品を見てもらえると、より楽しめるのではないかと思います。

V: 作品からは「立体の奥行きを感じる心」が伝わってきます。構図やフレームワークは最初からすんなり決まりましたか？

田中: 楽器を並べたとき、リコーダーの大きさがクラリネットに比べてかなり小さかったんです。手元にあったのはソプラノリコーダーだったので、これではリコーダーは使えないなあ

と、いろいろ調べてみたところ、アルトリコーダーを発見したんです。取り寄せてみるとサイズがぴったり！ ミニチュアはイラストと違って、サイズを簡単に変えられません。だから毎回、作品に使う小物を準備するときにサイズ感を合わせるのがいちばん苦労するところですね。

V: 駅舎や周りの建物なども含めて、田中さんのアート力が反

映されています。

田中: 今回の表紙作品には、学校の勉強と関連しないもの、音楽の授業と全く関係のないものは置かないことを意識しました。本や鉛筆など学校で使うもので構成しています。線路は本物の模型です。Nゲージ(9ミリゲージ)の線路がクラリネットやアルトリコーダーにぴったり合いました。主役をどう引き立たせるのか考えて、違和感を出さないようにいろいろな素材や小物を使い分けます。表紙を見た生徒たちがわくわくしてくれたらうれしいですね。

V: すっかり田中さんの“見立て”の世界に引き込まれました。最後に、高校生を含めた若者たちへメッセージをお願いします。

田中: 好きなことがあったら、とにかく真剣に取り組んでみるとよいのではないかと思います。僕は大学時代にずっと三味線を弾いていました。長唄と地歌です。和楽器のサークルに入り、プロを目指すぐらい練習して単位が危なくなったほど……！ 今はほとんど弾かなくなってしまいましたが、三味線の曲はよく聴きます。昔の自分の演奏を聴き返すことも。

V: 三味線というのは意外でした。特別なジャンルだという感じもなく、自然に心ひかれていったのでしょうか？

田中: 全く抵抗はありませんでした。基本的に他の人がやってなさそうなことに興味をもつ性格だったからかもしれません。楽器を練習することってこんなに楽しいのか！ と新たな世界が開け、のめり込みました。周りに認められるかどうか、ということは置いておいて、何かを本気でやってみる経験も人生の糧になるのではないのでしょうか。例えば、「プロゲーマーになりたい」「プラモデラーになりたい」でもよいと思います。高校や大学というのは、そうしたことを試せるいちばんよい時期だと思うので、あまり周囲の目を気にせず好きなことに挑戦してほしいですね。



《音楽に乗り乗り》